

「音楽表現」におけるリトミック活動

についての一考察

上田 浩平

A Study of Eurhythmic Activities in "Musical Expression"

Kohei Ueda

Abstract

Previous research has shown that rhythmic music, which uses music as a tool to enrich expression and imagination, and to engage in physical activities while "playing," contributes to the growth of the mind and body.

This study is a practice of expanding activities from "playing music" alone to "playing music" with a group of children from 3 years old to pre-primary school age as a part of intellectual education.

Keywords : eurhythmics, music education, musical expression, children's song, educational instrument

1. はじめに

昨今、保育現場や幼児教育現場ではリトミックの重要性が叫ばれている。しかし、現状では保育士養成校で学生にリトミックを指導することは非常に困難な状況である。限られた時間でピアノ初心者にはピアノを習得させること、「こどものうた」を習得させることで多くの時間を割いてしまうのが現状である。また「手あそびうた」などは、学生も子どものころに実際に接しているため、比較的多くの教授が可能である。しかし、リトミックは多くの学生が体験をすることなく保育士養成校等に入学し卒業を迎えている。そのような学生は、実際に現場に出た際にはじめてリトミックの重要性に直面し、経験をする学生も少ないであろう。

本研究は、筆者が自ら子どもたちへリトミックを行い、補助員として学生にも参加を行っ

(楽譜 2)

♩ = 104

C G7 C C

Piano

あ なた の お な

G

ま え は

C(onG) G C

あ ら す て き な お な ま え ね

子ども：〇〇です。
 学生補助員：〇〇ちゃんです。
 誘導員(=筆者)：さんはい！
 全員：〇〇ちゃ〜ん

全員が終わるころには、子どもたちも保護者も和むことができ、次の活動へとスムーズな導入が可能となった。

ここで、本研究のための実践として行った公開講座の指導案を記載することとする。下記の(図1)のように、講義を展開することで、これまでリトミックを体験したことない子どもたちが、3歳から入学前児の子どもたちと年齢を超えた活動を共にすることを可能とした。

(図1)

親子で体験～知育楽器でリトミック～ 指導案	
実施予定日	2022年10月8日(土) 10:00～11:15
テーマ	知育楽器でリトミック 秋を感じよう
目標	季節を感じながら音楽を楽しもう 楽器を製作することによって、音楽を身近に感じる
準備物	<ul style="list-style-type: none"> ・バルーン ・楽器製作①コーヒー缶(持ち手を付けて、蓋があかないように固定したもの) ②画用紙(秋らしい下絵が書いてあるもの。子どもたちが貼り絵をできるようにする、裏面に両面テープを張る) ③果物のおりがみ(栗、リンゴ、柿、ブドウ、きのこ) ④両面テープ(栗を張るための) ⑤名前タグ(星型厚紙。太鼓に下げられるように紐をつけておく) ・楽器作成用机(マジック、両面テープ、を共有で置いておく) ・絵本(大型絵本「秋色散歩」) ・ピアノ

時間	子供の活動	保育者の援助と留意点	環境の設定
0:00 0:03	受付 お名前呼び	・申込書と照らし合わせて名前確認 ・♪あなたのおなまえは 先生も自己紹介	ピアノ、マイク
0:10 0:13 0:20	絵本「秋色散歩」 秋色散歩の感想を述 べる リトミック	・絵本のまわりに集まってもら う ・もう一度絵本の開きながら、講師の質問に答え る ・秋を探してさんぽに出かけよう！ 立って行進 秋の味覚発見（栗♪大きな栗の木の下で どんぐり♪どんぐりころころ 芋♪やきいもグーチーパー 雨が降ってくる ・バルーンをもって行進する（散歩） ♪さんぽにあわせて行進し、バルーンを広げ ていく。左右に行進後、中央に集まったり 広がったりを行い、最後にはバルーンの中 に入る。	絵本 バルーン
0:40	楽器製作	太鼓を配る 一人一枚、絵を配る。 会場の端にのちこちに秋の味覚を置いておく 栗、芋、キノコ、どんぐり	バルーンの撤去 コーヒー缶の太鼓 絵 名前タグ 栗、芋、どんぐり、キノ コ各40準備裏に両面テー プを張っておく
0:55	太鼓完成 太鼓をたたいてみよ う	「みんな太鼓を見せて」 蓋の部分を叩く 底の部分を叩く 横面を削る	子どもたちが秋を探して 回るように少し離れたと ころに設置する
0:60	曲に合わせてたたこ う	♪幸せなら手をたたこう	

指導案に従い、導入後は絵本の読み聞かせを行った。「あきぞらさんぽ」（江頭路子著）の絵本の読み聞かせを行い、季節感を感じられる音楽をピアノで演奏を行った。子どもたちが静かに絵本の世界に入り込むことができた。「トンボ」が出てきた際は、「とんぼのめがね」、
「どんぐり」が出てきた際は「どんぐりころころ」をピアノで演奏することで絵本と音楽がリンクするよう効果を狙った(写真1)。

(写真1)



絵本の読み聞かせが終了した後は、振り返りを行い、絵本の中に出ていた「秋の生き物」について子どもたちに問いかけを行った。その際、「どんぐり」、「とんぼ」の声が上がった。読み聞かせの際にピアノで演奏した効果が出た結果となった。子どもたちから上がった声を拾い上げ、「どんぐりころころ」と「とんぼのめがね」に手あそびをつけて全員で歌唱した。またその後、秋の味覚にも触れ、子どもたちからあがった「栗」を取り上げ、「大きな栗の木の下で」に手あそびをつけて歌唱した。その他の味覚として上がった「お芋」から、「やきいもグーチーパー」を歌唱し、最後に「じゃんけん」を行った。様々な園からの参加であったが、上記に記した「こどものうた」は全員歌唱ができており、各園でも歌唱指導が行われていることが確認できた。

そこから更に発展的な活動として、プレイバルーンを使用し「秋を探しに散歩にいこう！」と題し、プレイバルーンを活用し音楽に合わせて行進を行った(写真 2~5)。行進した内容は(図 1)の指導案の通りである。最後のプレイバルーンの中に入る際は注意が必要なため、音楽を一旦止めて、注意喚起を行った。その後、音楽に合わせてプレイバルーンの中に入る練習を行った。その際にはプレイバルーンの中から見える景色についても、子どもたちが発する声を取り上げ、感想を共有することを行った。

(写真 2)



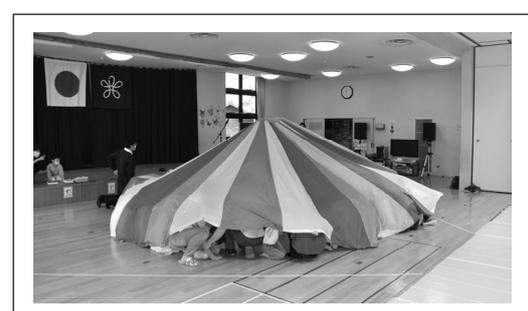
(写真 3)



(写真 4)



(写真 5)



プレイバルーンでの「あそび」の後は、講座で主となる活動を行った。自分で太鼓を制作し、その太鼓を活用しての「リズムあそび」である。すでに準備を行っていた画用紙と太鼓となるコーヒー豆缶を配布した。そこから、事前に折り紙で制作していた「どんぐり」「き

のこ」「くり」を補助員である学生がカゴの中に入れて、子どもたちの中を進み子どもたちが思い思いに手に取られるよう巡回を行った(写真6)。ここでも、指導員(=筆者)が「秋のうた」を数曲取り上げピアノで演奏を行った。常に音楽が流れている中での活動を心掛けた。まずは、画用紙の中に描かれているカゴの絵の中に、折り紙で作成した「くり」「どんぐり」「きのこ」を貼る作業である。子どもたちは思い思いに貼っており、お友達や保護者と相談しながら作業を進めていた(写真7)。

(写真6)



(写真7)



5歳児くらいになると、予備で準備していたシールも貼ることが可能であり、好きなシールを画用紙に貼った折り紙とバランスを考えて貼る作業を行っていた。筆者が予想していた以上に、子どもたちの活動が集中していた為、子どもたちが思う存分作業ができるよう、様子を観察し完成へと導くことを行った。指導案では15分としていたが、実際には20分強程度の時間を子どもたちは集中することができていた。この時間は筆者にとって予想外であり、喜びを感じる瞬間となった。

子どもたちが制作した太鼓の一例



太鼓が完成したところで、お互いに見せ合う時間を取った。それぞれの太鼓を褒め合う子どもや、保護者や補助員の学生に感想を求める子どもも見受けられた。保護者や誘導者(=筆者)、そして補助員の学生から褒められることで子どもたちの満足な表情を見ることができた。このことは、筆者にとってもやりがいになる一つの要素となった。その後、実際に太鼓を使ってのリズムあそびへと進めた。太鼓の上の部分(蓋)を叩く練習から行った。(楽譜3)のように、リズムの練習を行うことから始めた。

(楽譜 3)



まずは、誘導者が模倣演奏を行う。はじめに子ども達には見てもらうことのみを行った。その後、子どもたちに真似をして叩いてもらうことを行った。その繰り返し練習を行った。また、底を叩き音の違いを聞き取る活動も行った。太鼓の上の部分(蓋)はゴム製であったため少し鈍い音であったが、底は缶の金属であったため、また違う音が鳴った。子どもたちに、音の違いを感じさせることができた。ここでは、違いを聞き分けられる子どもと、そうでない子どもに分かれる結果となった。聞き分けることができたか否かに関係なく、多くの子どもたちは太鼓の上(蓋)の音の方が好みだった様子で、上部ばかりを叩いていた。また、側面に波型の凹凸があった為、打楽器の「ギロ」を鳴らすように爪で音を出すことも行った。一通り音出すことを楽しんだ後は、リズムあそびのまとめとして「幸せなら手をたたこう」に合わせて、1番は「蓋」、2番は「底」、3番は「側面」を叩く活動を行った(写真8~10)。最後に4回目を追加して、「蓋」「底」「側面」を連続して叩くリトミックを行った。また、テンポもゆっくりから徐々に速度をあげて叩く活動を行った。子どもたちは非常に楽しそうに取り組んでくれた。

(写真 8)



(写真 9)



(写真 10)



3. おわりに

本研究は、公募により参加した一般の市民へのリトミック体験活動であった。その参加者の全員がリトミックを体験するのは初めてであった。60分のリトミックの中で、3歳から入学前児を対象に行ったことで、個人差がある中でも全体での共同活動から個人への創作活動へと展開することで、参加者全員で協力して活動を行うことができた。はじめての体験者に、リトミックは楽しいものであるという認識を提供できたことは筆者にとって大きな成果である。「音楽表現」領域では、非常に重要視されているリトミックであるが、保育士養成校での実践は容易ではない。この体験を補助員として入った学生に体験させることができたことも筆者にとっては大きな成果の一つだと感じている。まずは、見て知ることが第一歩であると筆者は考える。

また今回のリトミック活動において筆者が大事にしていたことは、常に音楽が流れているということであった。しかし、これも容易にできることではない。活動冒頭の自己紹介では、説明しているところから常に音楽(ピアノ演奏)が流れている状況で、名前を言うタイミングなど、司会者・誘導者(=筆者)に合わせてピアノを臨機応変に弾き続けることが非常に重要である。ピアノ演奏者が、誘導者(=筆者)のタイミングに合わせて次の歌の前奏に自然に入ることができるテクニックがなければ成立しない講座であった。

当日は、子どもたちが様々な表情を見せてくれた。音楽のタイミングに合わせて自分の名前を言える子どももいれば、なかなか言えない子どももいた。その際に、誘導者が臨機応変に保護者や兄弟、お友達に紹介してもらおうなど、恥ずかしい思いをしている子どもが不快な思いをしないよう配慮が必要である。筆者も、保護者や兄弟に紹介してもらおうなど、音楽に合わせて楽しく自己紹介を行えるよう配慮を行った。また、太鼓を叩くリトミックに於いてもテンポよく展開することで、単純な動作をあきらめことなく楽しく行えるよう誘導することが重要である。このようにリトミックを行う際は、一連の流れを自然にテンポよく展開することが求められる。子どもたちが音楽を自然に感じることができ、音楽の中で活動することができるよう配慮することが重要であると筆者は考える。今回の実践を通して、今後も保育士養成校の教員として学生により良い模範を示せるよう尽力したいと考える。また筆者自身も引き続きリトミックの研究を続け、テクニックの向上及び研究に勤しんでいきたいと考える。

謝辞：本研究にご協力頂きました中村寛子氏に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 永倉栄子（1983）「天野式 幼児リトミック 第1集」 株式会社チャイルド社
- 永倉栄子（1987）「天野式 幼児リトミック 第2集」 株式会社チャイルド社
- 中村寛子（2018）「保育者養成校における、リトミック授業の実践について ―子育てサロンを活用して―」近畿大学九州短期大学研究紀要第48号 111頁～121頁
- 高牧里恵・松井いずみ・荒金幸子（2021）「幼児期におけるリトミック活動の身体的影響について ―4歳児の活動を中心に―」武蔵野大学しあわせ研究所紀要第4号 75頁～87頁